

(様式2)

「秋田大学みらい創造基金学生海外派遣支援事業」帰国報告書

記入日：2021年1月26日

所属：国際資源学部 国際資源学科 3年

氏名：高橋佑太

派遣先大学名（国）（フィリピン大学デリマン校）

在籍身分：交換留学生

派遣期間：2020年1月～12月

渡航年月日：2020年1月5日

帰国年月日：2020年12月26日

○派遣先大学における授業等の履修状況

2020年1月～5月

	8:30～10:00	10:00～11:30	11:30～13:00	15:00～17:00
月				
火		Speech30		
水		Fil3	Fil3	Anthro101
木		Speech30		
金		Fil3	Fil3	Anthro101
土				

2020 年 8 月～12 月

	7:00～8:30	13:00～14:00
月		
火	Art Stud 50	
水		Anthro 10
木	Art Stud 50	
金		Anthro 10
土		

○研究・学習概要及び今後の勉学計画

Anthro10 では、基本的な文化人類学や身体人類学を学びました。人類学という「人」の研究を生物学（解剖学と生理学）、哲学、社会学、言語学、考古学、心理学などの分野から学びました。人類学が正式な学問として登場したことで、人間をその物理的形態と文化的文脈で理解することを目的とした多くの質問、命題、方法論を学んできました。フィリピンの人類学は、米国からやってきた 4 つのフィールドアプローチのパターンに従います。物理/生物人類学、考古学、言語人類学、文化人類学の 4 つの分野は、時間と空間にわたって人類の全体的な理解を深めました。

Anthro101 では人類の進化の過程を見ながら、人類がどのように人類になったのかという境界はどこかを考えました。歴史的側面、身体人類学、文化人類学を使用して、人類の特徴を観察しました。私は人類の進化の過程を物理的進化と心理的進化に分け、ホミニゼーションを完了するために心理的進化が必要であるのではないかと考えました。したがって、心理的進化に影響を与える自然環境と生活環境を考慮して、ホミニゼーションがどこで完了したかを検討しました。しかし、文化の表現には複雑な思考が必要であるため、脳を大きくする必要があります。次に、脳の大きさが似ているネアンデルタール人とホモサピエンスの間にどのような違いがあるのかを調べました。ホミニゼーションは文化の顕現とともに完了したと結論付けます。したがって、ホミニゼーションを完了したネアンデルタール人の時点で、すでに人類に分類できるという結論になりました。

留学で履修した講義は人類学を中心とした講義でしたので、今後は卒業論文の執筆に活かしたいと思います。フィリピン大学で学んだ、人類の進化の中の文化の形成や身体的進化に伴う社会の変容は、今後の卒業論文の研究に大いに役立つと考えています。私の卒業論文のテーマはフィリピンに住むスカベンジャー（廃棄物を集め生計を立てる人々）です。大学の人類学の講義の中では、フィリピンの歴史に沿ってどのようにフィリピン人の文化が構築されたのかを学ぶことで、スカベンジャーの成り立ちを歴史に沿って学ぶことができました。

○生活面について

フィリピン生活は私にとって驚きの連続でした。生活面で驚いた点は3点あります。

1点目、学校の敷地内が広すぎるためジープニーに乗って移動しなければならないという点です。フィリピン大学はフィリピン国内最大の敷地面積を誇る大学のため、授業間の移動が大変でした。ジープニーに乗り、毎日講義に向かうことに慣れるまでは、どのジープニーに乗車すれば良いのかわからず、非常に苦労しました。ジープニーを乗り間違えてしまえば、目的地にたどり着けないことがあるので、最初のうちは入念に確認して乗車していました。日本の大学では自転車や徒歩で移動することがほとんどでしたので、敷地内の広さと講義がある学部棟が離れていることがある点は日本と異なり、驚いた点でした。

2点目、食生活が日本と異なる点です。日本では三食しっかり食べる食生活でしたが、フィリピンの食生活は朝コーヒー、昼食の前にメリエンダ（間食）夕食のようなものでした。（もちろん家庭によって異なる可能性がある）そのため、フィリピン人の友達と遊びに行くときはたびたびメリエンダとしてカフェに寄り、ケーキやコーヒーを講義のあいまに食べていました。大学の寮に住んでいたため、外食がほとんどでフィリピン大学内にあるエリア2という場所で外食していました。屋台のような雰囲気のお店が多く、大学生の憩いの場のような役割を果たしていたので、友人とよく食べに行っていました。

3点目、宗教と生活が一体になっているという点です。日本は無宗教の方が多く、生活の中で宗教的な考えを感じることは少なかったです。しかし、フィリピン生活の中で友達と過ごしていると日常生活に宗教が密接に関わっていることに驚きました。毎週友人と教会に礼拝にいくなかで、宗教とともにある生活を実際に体験することができました。日本の生活とは異なる宗教とともにある生活。非常に勉強になりました。

○その他留学全般にわたる感想

留学全般の感想として、私は自分の留学目的を達成できたため満足いく結果に終わったと思います。前期のころから積極的に大学内だけでなく外部の活動に参加してきました。そのおかげで、様々な友人とも知り合うことができ、自分の今まで知らなかった世界を知るきっかけができました。コロナ禍においても、そのつながりが生きてオンラインであっても充実した留学生活を送ることができました。

私の留学の目的は三つありました。一つ目、英語力の向上。二つ目、卒業論文の情報収集。三つ目、新しいスキルの獲得です。コロナ禍であっても工夫することで達成できるものも多く、これらの目的を概ね達成することができました。

一つ目の英語力の向上については、前期には積極行動によってアウトプットが多い生活でした。毎週教会へ参列や、聖書についての討論会・留学生同士の交流会を通して、英語でのコミュニケーションが多かったです。後期には、コロナ禍という状況もあり直接的なコミュニケーションの機会は減り、インプットが多い期間でした。自分が持っている TOEIC の教本を何周も解くことができました。結果として、定量的な結果はまだ出ていませんが、体感として英語力は向上したと感じています。

二つ目の卒業論文については、前期に週 2 回参加していたボランティア活動の中で、フィリピンのスカベンジャーの現状を生の情報で知ることができました。また、スカベンジャーを支援している NPO 法人とのコネクションを持つことができました。コロナ禍の際には、現地での活動は制限されたため、オンラインでの活動を続けていました。生の情報だけでなく、論文を調べる機会にもなったので、今後、どのように卒業論文を進めるべきか事前に知ることができました。

三つ目、新しいスキルの獲得については、前期後期ともに獲得することができました。前期の際には、ボランティア活動を通してプログラミングスキルを学び、組織の情報処理の課題解決に貢献しようとしていました。また、ボランティア活動と大学の講義を通して、タガログ語という新しい言語を日常生活レベルで使えるようになりました。後期には、オンラインでの尺八レッスンをフィリピン人の友人とともに受けることで、尺八という新しい趣味も作ることができました。

上記三点の目的を私は概ね達成することができたと考えています。コロナ禍の影響もあり 100%満足する結果ではなかったかもしれませんが、それでも自分ができることを考え、十分行動できたと思います。



○渡航費補助について

この度は、秋田みらい創造基金から渡航補助をしていただきまして、誠にありがとうございました。皆様の手厚いご支援のもとコロナ禍であっても無事に一年間の留学を完遂することができました。正直のところ途中で何度か心がくじけそうになった場面もありましたが、自分の成長のため、私を支えてくださっている方々の期待や支援を無駄にしたいけないという想いで、最後まで留学を継続することができました。

一年間の留学生活は、様々な困難がありましたが、結果として私を人間として非常に大きく成長させたと思います。コロナウイルスという世界各地でパニックになっている中、留学生という身分の私が現地で何ができるのかを考え行動することができました。本来の留学生活の予定と大きく異なる生活でしたが、そのギャップの分だけ自分のありかたについて思考する機会が多かったです。現地のニュースを通して、恐怖を感じる場面もありましたが、それでも、考え行動に移した経験は私にとって成長の糧になりました。

この経験を通して、私は今後自分の人生の目的を達成するため、また、日本に貢献するために社会人になりグローバル人材として活躍したいと思っています。活躍する場はまだ定まってはいませんが、必ず自分のポテンシャルを

(様式2)

最大限に発揮できる場で、いかに力を出したいと思います。しかし、その前に自分がお世話になった秋田県に対しても私ができることで恩返しをしていきたいと思います。大学生として残り1年間、フィリピンでの生活のように自分に何が必要で、何をすべきなのかを考えながら、愚直に努力を積み重ねていきます。その道中、自分を支えてくださった方々への感謝の気持ちを胸に、初心を忘れずに前に進んでいきたいと思います。